

都市と農村から見た中国社会の境界（要旨）

秦兆雄

（神戸市外国語大学）

一. はじめに

本発表は「戸口制度」によって象徴される都市と農村の二元構造に着目し、中国研究において民族の視点よりも都市対農村及び弱小民族の視点の重要性を指摘したい。

二. 都市と農村の二元構造

中国では人民公社解体後、大量の出稼ぎ人口が農村から都市へ流れ込み、社会全体の関心事だけではなく、国内外の研究者の研究対象となった。先行研究は、主に労働力移動など人口移動や経済体制及び都市と農村の関係などの視点から「戸口制度」の内容と特徴、形成要因、歴史的な変遷及び改革方案などの論議であるが、その形成及び存続要因などに関する議論はまだ不十分である。

拙稿（秦1998）は、都市と農村の二元構造を再検討し、以下の9点を論じた。

- ①「戸口制度」が農民革命によって生まれた新中国で制度として成り立ち、未だに存続し得た大きな要因は、単に工業化を優先し、資金不足を解消するためだけではない。
- ②歴史上、都市とは政府の所在地、権力の中心地であり、農村とは常に都市に必要な農作物及び労働力を提供する場所に過ぎず、絶対多数の農民が少数の都市民を養い、支えてきたという伝統の影響も大きい。
- ③都市は農村とは異なり、対外交流が保たれているので、中国が共産党政府の指導によっていかに理想的な社会主義国家に建設されたかを効果的に宣伝するためにも少数の都市民に対する優遇措置を採る必要がある。
- ④政治的な目的を達成し、権力をさらに強化するために、都市の反対勢力や失業者及び犯罪者を農村に送り込み、しかも彼らの都市戸籍を抹消することにより、政治中心としての都市を「浄化」し、政治統合を維持することが出来たのである。
- ⑤歴史上、中華世界では、伝統的な都市と農村の構図は権力者及び都市民にとって理想的な秩序である。この秩序があったからこそ、都市には中華思想が生まれ、同時にこの秩序を維持するためには、常に農民の都市流入を制限しなければならない。
- ⑥多くの農民指導者から成り立つ共産党が農民の支持を得て革命を成し遂げた歴史的な背景を考えれば、伝統文化は簡単に変えるものではなく、様々な形で活用されている。
- ⑦中国大陸では香港返還以前に都市と農村の間に既に「一国二制度」が存在していた。この意味では、中国はまだ近代国民国家とは言えない。
- ⑧都市と農村の二元構造は経済の市場化、人口の都市化だけではなく、政治の民主化に

対しても障害となっている。革命以後の一連の民主化運動が流産と終わった一因は、一部の都市民、特に知識階級や学生達の努力が広大な農村部の利害と結合せず、またそれ故に農民の支持を得ることができなかつたからでもある。

⑨政府が改革を深め、真の近代国民国家を目指すのであれば、都市住民と農民の利益格差に配慮し、徐々に「戸口制度」を改善すべきである。そのためには、農村部における教育水準を向上すると同時に、都市民の意識改革も必要とされる。

三、民族視点の再検討

人類学者の多くは、漢民族と少数民族という二つの視点から中国社会を分析するが、農村出身者から見れば、全ての中国人は民族を問わず、戸籍制度によって「城市戸口」と「農村戸口」という二大身分に区別されていることにこそ注目すべきである(秦1995)。

① 「城市戸口」と「農村戸口」との間の通婚は困難だが、「城市戸口」同士または「農村戸口」同士の通婚は比較的容易である。

② 農民と少数民族はどちらが弱者？

少数民族は入学試験、計画出産政策、火葬政策などに関して優遇され、各級政府には民族委員会及び人大代表が彼らの利権を守る。しかし、農民はそれらの諸政策に関して異なる処遇を受け、農協もなく、各級人大代表権もない。

「農村戸口」よりも「城市戸口」に、漢族よりも少数民族に戸籍変更したがる傾向

③民族アデンティティーの多様性・多重性・流動性・曖昧性。

④歴史上、農民も少数民族も都市社会の周辺に位置づけられ、教化される対象であったが、近代に入り、両者は人類学や民族学、社会学、民俗学の研究対象とされた。

四、中国人類学の独自性の再検討

近代人類学には、自民族研究、異民族研究に関わらず、都市の知識人達が農村あるいは非都市地域の非知識人的な社会や文化を「異文化」として観察し、そこから人類社会或いは文化の普遍性と個性を探ろうとする学問だったという特徴がある。それを可能にしたのは、都市の知識人たちは大概農村や非都市地域の住民に対して権力を持ち、常に上から睥睨する態度で観察を行うことが出来るからである。知識人にとって農村や非都市地域は「植地的」でもある。

但し、歴史上、中国知識人は皇帝の統治を支持して、儒教の倫理道徳に関する知識の担い手として被支配階級の農民や少数民族を一方向的に教化する役割を果たしてきた。彼らは上の皇帝の絶対的な権勢に常に迎合する必要はあったが、下の教化すべき農民や少数民族を他者として理解しようとする平等意識や研究姿勢を取る必要性はなかった。これは中国人類学が伝統的な学術から内発的に発展し得ず、清末と中華民国初期に日本及び欧米諸国から輸入されてから、百年以上の歴史を有しても、未だに成熟していない主な要因ではないか。この未熟さは中国知識人全体の自己認識と他者理解の状況を表して

いると思われる。

[参考文献]

- Hsu, Francis L. K. 1948 *Under the Ancestors Shadow: Kinship, Personality & Social Mobility in China*. Stanford University Press.
- Guldin, Gregory Eliyu 1994 *The Saga of Anthropology in China: From Malinowski to Moscow to Mao*. M.E. Sharpe, Inc. (2000胡鴻保・周燕訳『中国人類学逸史——從馬林諾斯基到莫斯科到毛沢東』社会科学文献出版社)。
- Suenari, Michio 1992 *Anthropology of One's Own Society*, in Chie Nakane & Chien Chiao (eds.), *Home Bound: Studies in East Asian Society*, pp.59-80. The Centre for East Asia Cultural Studies.
- 王建民1997『中国民族学史』(1903-1949)上巻、昆明：云南教育出版社。
- 王建民・張海洋・胡鴻保 1998『中国民族学史』(1950-1970)下巻、昆明：云南教育出版社。
- 秦兆雄 1995 「農村から都市への遠い道」、曾士才・西沢治彦・瀬川昌久編『アジア読本・中国』、河出書房新社。
- 1998「中国の都市農村二元構造論再考」『神戸外大論叢』第49巻4号：41-63頁、神戸市外国語大学研究会。
- 2005「論文明内部対話」『神戸外大論叢』第56巻7号：43-60頁。神戸市外国語大学研究会。
- 2006 「中国人類学の独自性と可能性」、竹沢尚一郎編『世界の人類学』国立民族学博物館研究報告書(刊行予定)。
- 張玉林 1997「国家と農民の関係からみた現代中国の戸籍制度」、『中国研究月報』594号、中国研究所。
- 周大鳴 2005 『渴望生存：農民工流動的人類学考察』、中山大学出版社。
- 末成道男 2005「自社会研究に関する覚書」中西裕二編『自社会研究としての人類学の確立にむけた基礎的研究』111-117頁、科学研究費補助金研究成果報告書。
- 宋蜀華・満都爾図(編)2004『中国民族学五十年：1949-1999』、人民出版社。
- 陳桂棟・春桃(納村公子・梶田雅美訳)2005『中国農民調査』、東京：文藝春秋。
- 段偉菊 2004 「大樹底下同乘涼」『祖蔭下』重訪与西鎮人族群認同的変遷『広西民族学院学報(哲学社会科学版)』(1)39-45頁。
- 中西裕二 2005 『自社会研究としての人類学の確立にむけた基礎的研究』、科学研究費補助金研究成果報告書。
- 費孝通1948 「論『知識階級』」費孝通・吳晗他『皇権と紳権』10-22頁。学風出版社。
- 1948 「論師儒」費孝通・吳晗他『皇権と紳権』23-38頁。学風出版社。
- リーチ、E. (長島信弘訳)1985 『社会人類学案内』岩波書店。